

IMFが成長率見通しを2年ぶりに引き下げた理由

昨年10月、IMFは世界経済の上昇局面は力強さを増していると述べていました。今回の世界経済見通しでは、足元の回復は継続が見込まれるも、世界経済の成長に対するリスクは下振れリスクが優勢と表現しています。背景に、債務の増加、金利上昇、貿易戦争の悪化懸念などを指摘し、特に貿易戦争については想定されるシナリオに対して経済への悪影響も試算しています。

IMF世界経済見通し：貿易戦争懸念などで世界経済の成長率予想を2年ぶりに下方修正

国際通貨基金(IMF)は2018年10月9日に最新の世界経済見通し(WEO)を公表し、18年、19年の世界全体の成長率予測を3.7%と7月時点(3.9%)から0.2%下方修正しました(図表1、2参照)。世界経済見通しの下方修正は16年7月以来、約2年ぶりとなります。

また、IMFは米政権が仕掛ける貿易戦争が拡大した場合の世界景気への影響も試算し、最悪のケースでは世界経済は19年以降に最大約0.8%下振れすると警告しています。

どこに注目すべきか：世界経済見通し、貿易戦争、政策金利

昨年10月、IMFは世界経済の上昇局面は力強さを増していると述べていました。今回のWEOでは、足元の回復は継続が見込まれるも、世界経済の成長に対するリスクは下振れリスクが優勢と表現しています。背景に、債務の増加、金利上昇、貿易戦争の悪化懸念などを指摘しています。特に貿易戦争については想定されるシナリオに対して経済への悪影響も試算しています。

なお、IMFは今回のWEOで、鉄鋼やアルミ、中国製品への輸入に対する合計2500億ドル(500と2000億ドル)の関税の影響は成長率予想に反映させていると説明しています。

この点を踏まえ、まず、18年の成長率予想を振り返ると、世界全体は0.2%下方修正されましたが、先進国は2.4%で前回と変更ありません。IMFは18年の米国成長率は貿易戦争からの影響を小幅にとどまるとする一方、財政政策が成長を支えるため、2.9%という相対的に高い成長率を見込んでいます。日本は設備投資拡大などによる景気押し上げを反映して0.1%上方修正し、1.1%としています。反対にユーロ圏の回復ペースの減速を反映して2.0%へ下方修正しました。

次に18年の新興国の成長率を見ると4.7%へと、IMFは0.2%下方修正しました。マイナス要因として、例えばブラジルは0.4%下方修正されていますが、5月のトラック運転手のストライキの景気への影響を反映させたと説明しています。

また、原油価格の上昇で、トルコなど輸入国の成長へのマイナス寄与も新興国の下方修正の背景と指摘しています。尚、新興国は18年、19年共に利上げの影響も指摘しています。

次に、図表2で19年の成長率を見ると、先進国、新興国共に下方修正されています。

先進国の下方修正は米国がけん引し、19年まで財政政策の下支えは期待されるも、主に米中貿易戦争の影響で、経済成長率は悪影響を受けると、IMFは見込んでいます。

新興国の19年の成長率も下方修正されました。中国は米国の制裁関税の影響で0.2%下方修正されています。インド、ブラジルなど主要新興国も、下方修正されています。

より大幅な下方修正が東欧の新興国に見られます。東欧の国々は小国かつ開放度が高く、経済に占める貿易の割合が高い傾向があるため影響が大きいと見られます。

今回のWEOは下方修正リスク、特に貿易戦争についての言及が目立ちます。そこでIMFの貿易戦争については、追加のレポートを発行する予定です。

図表1：IMFの主な国・地域の2018年経済成長見通し
時点：2018年7月(左)、2018年10月(右)の2時点比較



図表2：IMFの主な国・地域の2019年経済成長見通し
時点：2018年7月(左)、2018年10月(右)の2時点比較



出所：国際通貨基金(IMF)のデータを使用しピクテ投信投資顧問作成